## 陶炎祭のはじまり（パネルディスカッション）

**2022 年（令和 4 年）9 月 23 日開催**

**笠間焼誕生 250 年記念シンポジウム**

**「陶炎祭はこうして始まった　～ 40 年を振り返る～」より**

| | | |
|---|---|---|
| パネラー | 大　津　廣　司 | （笠間焼協同組合理事長） |
| パネラー | 増　渕　浩　二 | （同組合理事） |
| パネラー | 寺　本　　守 | （同組合理事） |
| パネラー | 筒　井　　修 | （同組合） |
| パネラー | 藤　本　　均 | （同組合） |
| コーディネーター | 菊　地　　弘 | （同組合理事） |

笠間焼 250 年記念シンポジウム

**菊地：**今では何万人もの来場者がある，笠間の一大イベント，陶炎祭。多くの方々の苦労があり，実施してまいりました。その誕生については，過去の記憶として，それぞれ意見や思い出があると思いますが，陶炎祭当初（1982 年）の頃について伺います。

**筒井：**私と寺本氏，小林東洋氏の3人で 1980 年，アメリカに行った際，各地の公園でクラフトフェアを実施しており，私たちの仲間内でも同じようなことが笠間でも実施できないか，という話をしていました。

**寺本：**当時，仲間と一緒に車に焼物を積んで東京や横浜へ行き，販売していた時代です。その仲間とともに「アメリカへ行った際のクラフトフェアを実施したい」といった話をしながら，どのようにしたら焼物が売れるかを日々考えていました。

陶炎祭初期・集合写真

**菊地：**当時，笠間市内に販売店がない時代で，我々は独立したらどのように生活していくのかといった課題はありました。陶炎祭の歴史を振り返ると様々な経緯があります。実施に向けた具体的な話について，コンセプト，開催場所，行政支援など，当時の出来事について増渕さんに伺います。

**増渕：**陶炎祭が生まれたのは奇跡的・劇的な誕生でした。笠間にイベントが欲しい思いは多くの方が持っていたと思います。私・小林氏・共販センター川野輪氏の3人で「笠間においても作り手全員が参加できるイベントを実施したい」という話が起き，具体的な計画を立案するため協議しました。当時，笠間焼連合組合（現・笠間焼協同組合）の主催イベントとするため相談したところ，産地，問屋，

連合会主催の「笠間焼大陶器市」を開催している理由で一度は断られました。再度計画を見直し，「売るためのイベントではなく，作り手の修行の場」であること，「今まで笠間焼で貢献された物故者の方への慰霊」，「火の神様に感謝の気持ちで祈祷し，精神性の高いいわゆる崇高なイベント」とすることで，市・連合会からの協力を得られることになりました。開催場所である「芸術の村」での決定は，福田氏・川野輪氏と相談するなど，多くの人たちのご英断や働きかけ，了解，協力がなければ開催できなかったわけです。

また，「陶炎祭」は漢字で書くと「陶器 / 炎 / 祭」と書きます。火から生まれるもので，土を火に入れると陶器になる。火の神様を大事にし，物故者の方たちがいたから，私たちがある。そのような方たちを大事にしようということで，開催当初はお坊さんを呼んだり，神社への参拝をしました。このような方々の努力の中で生まれたイベントが「陶炎祭」です。

火の神様を祀る焼物

**菊地：**物故者に対する礼を尽くす目的で火の神様を祀る焼物が，芸術の森公園の入口（工芸の丘の下の駐車場）に飾られています。大津理事長も当初から参加されていますのでお伺いします。

**大津：**とにかく，先人たちを大切にしようと慰霊祭に近いことを実施しました。この焼物が飾られていることを知らない方が多いと思います。今後も大事に残してまいりますので，お立ち寄りの際は是非ご覧になってください。

**菊地：**当時，資金的にも大変苦労したと思います。ご寄付いただいた方々の氏名も観音様の台座に記載されていますので補足いたします。また，当初は趣向を凝らした「手作り小屋」が，陶炎祭の良さであると言われ，今なお手作りで参加している方もいます。藤本さんは「陶炎祭」は個展の場であるという考えから，様々な板を組み合わせて作っていく発想が当初からあったと伺っていますがいかがですか。

小屋つくり①

**藤本：**作ることが好きなだけで，一つの仕事を極めることが難しいと考えていた時，笠間焼ロクロ職人や石職人の「仕事場ぐらいなら自分でつくれるよ」との拘りのない話に触発され，私も家つくりにチャレンジしていました。「陶炎祭」でも展示空間も焼物と同様の気持ちでつくりたいと思い，小屋つくりを楽しみにしていました。それ以来，実験的で自由な発表の場にしたいと，時々ですが参加しています。

**筒井：**私が考えている陶炎祭の魅力は「手作り感」です。私だけで

はなく小屋・内装など「このままお店ができるのでは」と力を入れて作っていました。それが来場者に伝わったものと感じています。また，飲食も自分たちで出店するという形で始まったため，陶炎祭のなかにおいて名物料理があり，それも魅力の一つと感じています。出店者で力を合わせて作ってきたことが会場全体に雰囲気として出ているような気がします。今後も「手作り感」は失いたくないです。

**菊地：**寺本さんも，当初から色々なアイデアを出し，面白い趣向を凝らして出店しています。特に飲食においては，名物料理として手作りの「朴葉ピザ」が大変人気があると伺っていますがいかがでしょうか？

**寺本：**今は普通に焼物を販売していますが，40 年前は作り手個人が焼物を販売するために出店することは考えられなかった時代でした。そのため，私は焼物ではなく飲食物の販売で開催当初から参加しています。なお，陶炎祭は，良い焼物があるから飲食物も人気となっていると考えています。

**菊地：**開催当初の会場は，「芸術村」の一角で砂利を敷き均したなかで実施し，1993 年に会場が変更となりました。会場の変更や，実行委員会組織から笠間焼協同組合に主催が変更していく経緯につきまして，大津理事長にお伺いします。

**大津理事長：**「芸術村」で陶炎祭が始まった当初は作家 36 人の出店者でした。大半は埋まっていた感じがします。最初の第 1・2 回は問題なく実施しました。「徐々に来場者や店舗も増加し，他の広い場所が必要である」といった意見があるなか，第 11 回まで「芸術村」を会場として開催しました。第 12・13 回は，現在の「笠間工芸の丘」の周辺に会場を移し，第 14 回は私が実行委員長となり，現在の「芸術の森公園」を会場とした場所に定着していくわけです。当時，「芸術の森公園」は更地の状態で，車の駐車スペースやテントを張る場所には良い場所でした。「イベント広場がきちんと完成してからでも遅くないのでは」といった意見がありましたが，テストケースとして思い切って移ろうと決断しました。さらに，県・市と協議し，「芸術の森公園」を使用するためには，実行委員会組織ではなく，補償が可能な組合組織が条件であったことから，笠間焼協同組合が主催する結果となりました。

**菊地：**陶炎祭は単に焼物を販売するだけではなく，参加陶芸家のアイデアから企画されたイベントとして5月3日は「夜祭り」を開催していました。第 1 回はカントリーウェスタンのジミー時田さん，第 5

小屋つくり②

会場風景（芸術村）

夜祭り

回はジャズフュージョン尺八奏者のジョン・海山・ネプチューンさん，第 16 回はブルースで人気のあった憂歌団，第 26 回は「悲しい色やね」でヒットした大阪の上田正樹さん，翌年はフォークシンガーのあがた森魚さんをお迎えしました。そこで，イベントに関係していた寺本さんにお伺いします。

**寺本：**「会場内でゆっくり音楽を聴くのではなく，作家同士で騒ぎたかった」ということで企画しました。バンドを呼ぶ費用を賄うため，金銭徴収の有無について意見がありましたが，その当時は様々な方が来てくれて，夜の交流が楽しかった思い出があります。「バンドや音楽の力は凄いな」という感じです。

**菊地：**さらに，出店作家の様々な茶碗を使い，お茶をいただける茶席コーナーも人気があり，池が見える非常に良いロケーションで開催しています。近年は，新型コロナ感染防止対策のため実施していませんが，筒井さんが担当されていましたのでお伺いします。

茶席コーナー

**筒井：**私は，お茶を振る舞う小屋づくりを担当していました。先生方には，ほぼボランティアで参加していただき感謝しています。とても人気があり，1 日 500 杯くらい出るそうです。

**菊地：**最後に，これからの陶炎祭について，どうあってほしいか伺ってまいります。

**藤本：**こうあってほしい陶炎祭のイメージは無く，各自の好奇心での参加が良いと思います。当初，来客も少なく個人的に「販売はギャラリーの役割で，陶炎祭では売れない」と思い込み，創意工夫と作ることの楽しみでの参加でした。その喜びを思い出しアイデアが湧き上がった時，わがままな参加になりますが今後も参加したいと考えています。

**増渕：**陶炎祭も非常に大事なことですが，過去に笠間焼が存亡の危機に立たされたことがありました。また，笠間焼協同組合の設立についても笠間焼にとって画期的なことでした。そのほか，県・市などの行政の産地振興に協力いただけたこともありがたいことでした。1950 年当時は，笠間は甕（かめ）やすり鉢の産地だったところ，生活様式が変わったことで全く売れなくなり 30 件くらいあった窯元が 7 件くらいに激減してしまい，笠間焼がなくなってしまう危機感を持ちました。今の笠間焼があるのは，その時の古い窯元の人たちの努力があったからです。そのため「笠間焼に関係した先輩方や物故者の方々を慰霊する」という気持ちが大事だと思います。現在，伝統工芸産業は向かい風です。生産額も最盛期と比べて相当減ってい

ます。そのため，もっと頑張らないとダメだなと感じています。

**大津理事長：**笠間焼 250 年という歴史があるなかで，陶炎祭も 40 年以上続いています。コロナ禍で 2020 年の第 39 回陶炎祭は中止としました。2021 年の第 40 回以降は，感染防止対策のため会場をフェンスでガードし，手洗い，検温など，経費がかかる非常に厳しい状況下で，以前の多数の来場者で賑わうイベントとなるか，といった心配はありました。2022 年の第 41 回から有料化とした際にも様々な意見をいただきました。そのため，いかに来場者に喜んでいただけるか工夫しながら，今後も続けていきたいと思っています。これからも出店する作家の方々にお伝えしたい点は，「本当に見てもらうんだ」という気持ちで制作していただきたい。さらに，陶炎祭に出店・展示する以上は，見本作品をきちんと用意し「来場者に満足いただけるような品揃えをお願いしたい」と考えています。

新型コロナ感染防止対策・入場ゲート

**寺本：**当初から，笠間焼の先輩たちと一緒に自由な発想で参加させていただきました。今，美術館を見てもらえればわかるよう，笠間焼の若い作家の方たちも良い作品を作るようになっています。そのような方たちもどんどん陶炎祭で発表し，作品がたくさん並ぶようなイベントにしてほしいと思っています。これからの若い作家の方に期待しています。

**筒井：**今の若い作家の方たちも，手作り感を持って参加していただいていますので，魅力度はとても良いと思います。参加する側が新しいことを発表したい，売りたい，楽しみたい，様々なスタンスで参加できるのも陶炎祭の魅力だなと感じています。多くの来場者が楽しみにしている陶炎祭なので，作り手である我々も「新しい物を作っていくエネルギーは失いたくない」と思っています。

陶炎祭出展者集合写真

**菊地：**当初から，様々な方たちが関与し，個々の持っている個性や人間力が結集して，今の陶炎祭ができたと感じています。また，ここに至る経緯は，先人たちの想いがあって，今の笠間がつくられてきたのだと思います。幸い，人材育成では，市，陶芸大学校，美術館，市民の皆さまの協力があり，学ぶには最適な場だと思っています。そのため，私たちはそれを大切にし「次の世代に繋げていかなければならない」と感じています。笠間焼というのは，笠間の大切な歴史的財産，陶芸の文化だと思います。担っていくのは我々ですが「是非とも市民の皆さまの方たちにも暖かく見守ってもらって育てていただければ良いのかな」と思っています。